

安房秋色

長 沢 美 津

(一)

万葉地理の実地調査といふものがどのやうなにか見当がつかないままに、勇気を出して照り降りにかかはりなく傘一本に身を托するつもりで、雨の音をききながら前夜は床についた。

九月二十二日、朝起きると雨はやんでをり空も次第に明るくなつて来たので、ビニールの風呂敷を袍のなかへ入れて傘を持つのも止めにして全くの身軽な思ひで家を出る。お茶の水の駅で乗りかへるとき空を見ると、西から南にかけて黒い雲が拵がり始めてゐる。矢張り傘一本は持つてくるのだつたと思ひながら市川ゆきに乗る。ともかく今日は館山迄ゆき、明日の秋分の日を一日内房から外房の方へ陸路を横断して防人の歌のあとを辿つ

て見たいといふ念願なのである。両国駅十時十分発の汽車はすいてゐた。余り外や空を見ないことにして地図を見てゐるうちに千葉あたりからどうやら明るくなつてくる。やがて五井の辺までくると雲も漸くうすれて海近くなる爽やかさが感じられる。

東歌の宇麻具田のあたりはこれから東南に入った馬來田の嶺のあたりの丘陵地であらうか。高橋虫麻呂に、安房に継ぎたるあづさ弓周^{すゑ}准の珠名^{たまな}娘^{むすめ}子の作を^し為^しさしめたのはこのあたりであらうか。伝説を散文化して敘事詩的な傾向では第一人者と云はれる虫麻呂が、常陸在官以前のまだ若い頃のものとしてみると、青年期らしい官能的な表現と野趣を生かした描写は虫麻呂の作歌過程もうかがはれ、地域的にも当時は安房の方が文化が高くてそ

れより遅く開化したのがこの辺であることを示してゐるのであらうかなどと思はれる。

木更津をすぎ保田についた時中学校の房州一周の修学旅行の生徒が乗りこみ車内は急に賑やかになつた。すぐ入るトンネル、またひらける海、所謂田子の浦と云はれるあたりをこの人達の歓声のうちに送り迎へて館山につく。

駅には利田正男氏が来てゐられる。よく時間がわかつたことと思ふと両国からの汽車の回数は少ないので午後つくと云へば大体見当はつくとのことである。駅前広場の植込みには、まゆふの植わつてゐるのを見て、案内されるままに小西清子さんの御宅にゆく。

ここで千葉県の資料などを見せて頂く。いろいろ準備をしようと思つてゐてもなかなかその暇が得られなかつたので、静かなお部屋でそれらのなかからメモをする。しかし日の暮れてしまはない先にと一人でそつと砂地のお庭を抜けて町を通り海辺に出る。殆ど私他には人影もない。雨は落ちなかつたがはつきりしな

い秋の海岸の暮れがたである。幾夏か岩井の海辺に小さかつた子供達と過した折、ヨットに乗り館山まで来た日のことなどが思ひ返される。足音にふりむくと四、五人の子供が防波堤の上を籠を携へて器用に渡りゆくのが影絵のやうに動いて美しい。

海の暮色にいつまでも見とれてゐるが余り時を過して、もと来た道をひき返す。夜は田中鯉二氏はじめ数人の方々がお集り下されいろいろ参考になるお話をきく。

卷十四の未勘国雑歌部の、

左奈都良の岡に粟蒔きかなしきが駒はたぐとも吾はそと思はじ

(三四五一)

この左奈都良に定説なく、神名帖に「常陸国那賀郡酒烈なる磯崎神社」とあり、また一説に安房国安房郡館山の東の真倉村とあり、現在館山市大字上真倉にある丘陵地は御陵山、高野山とあつて、このあたりが左奈都良の岡であらうと思はれるとのこと、館山市の東北部でその端は神戸村に連なる丘陵地がこれでないか

らうか。

卷十四の未勘国相聞部の、

安波をろのをる田に生はる多波美豆良引かばぬるぬる吾を言な絶え

(三五〇一)

古義には「和名抄」をひいて「常陸の国那賀郡阿波郡の国ならむ」とあるが松岡静雄「論究」には安房国安房郡とあり、武田祐吉氏の「全註釈」には安房の国となつてゐる。多波美豆良はどのやうな処とも未詳となつてゐるがこの辺では「あをみどろ」を「あをんどろ」といひ、安房の峯々にひらかれてゐる田は灌溉の爲に必要な時でも水を張つたままで置くさうで、これを「天水場」と云つてこの天水場には「あをみどろ」が次山生えるとのこと、中部山間の歌であつてこの二首は共に安房の歌であらうと思ふなどの説をきく。引き続き歌会となつてなかなかお話につきさうもないのであるが、明日はなるべく早く出掛け度いと思ふので皆様にお別れして駅前前の宿屋「紋屋」に一泊をする。

(二)

九月二十三日、眩しい朝日が廊下一ぱいにさしてゐる。お天氣の心配はもういらない。今日はまづ、

家風は日に日に吹けど吾妹子が家言持ちてくることもなし(四三三三)

右一首 朝夷郡上丁丸子連大歳

この丸村出身の防人のあとを訪ねることにする。同道して下さる利田さんは昨夜遅かつたのに菅野村から八時といふにもう迎へに来て下さる。駅前から丸行きのバスが出てゐるが一日二往復で九時半が始発とのことそれを待つ、かれこれ乗りこんだ人は座席一ぱい位で車は動き出す。国中平野を貫く房州街道を走るのである。稲は穂を垂れいま一息の最好の稔りを急いでゐる両側の風景は豊かさのなかに緊張感の伴ふ快さである。町はづれになつてからは舗装もなくなり、スピードが加はると車体は少し揺れるがいま通りすぎた道が穂波のなかに白く浮き上り、窓硝子を越す陽ざしが熱い位に車内に満ちてくるのであつた。上総の地名は

もと麻のよく成長するふさのくにの意で都より近いところが上つ総、遠いところが下つ総となつたのださうであるが現在は麻の栽培されてゐるところはないさうである。稲宮といふ地名のところを過ぎる。なだらかな丘陵地帯を控へながらあたり一帯は稲田でそれこそ稲房を垂れてゐる。石堂あたりから道が細くなりやがて終点丸川谷となる。このあたりが朝夷郡丸村で朝夷郡は現在の七浦・千倉・千歳・和田・江見・大海の町村を結ぶ海岸線と丸山川の流域を含む地域を指すのである。

バスを降りて左に折れてゆくと宮川橋がある。この橋を渡り道の赴くままにゆくと莫越山神社がある。安房六座中五社の一つと云はれはしくはこのあたりを宮下部落と云ひ、今少し奥にゆくと丸本郷部落となるのであるが総括して丸村と云はれてゐるといふことである。莫越山神社では午後社務所で歌の集まりがあるので、或ひは古老の人達に何かきき得る望みはあるがまだ少し時間が早やすぎるので附近の石堂寺へと向ふ。

聖武天皇勅願寺神龜三年行基菩薩開創といふこのお寺もいまは地域の一部分が村立中学校となつてゐるが、境内は勿論塔も堂宇も国宝の本尊仏も木立のなかに鎮まりゐるまして今年はもうきかれないと思つてゐた法師蟬が鳴いてゐる。来意を告げると今日はお彼岸のため住持は留守であつたが堂守りの人が種々話をしてくれる。お萩を御馳走しながら莫越山神社はいま一つ豊田村香見にあるが丸の方が古いのだといふことなどを語りきかすのであつた。

時間を見ると丁度十二時である。午後八時のバスを十四時までまつより、私はどうやら歩けさうな自信があるので再び館山までひき返して、汽車で外房の方へ廻るより歩いて向ふの海岸線まで辿りつきませうと提案する。

今朝余程館山の駅に荷物を預けて来ようかと思つたが成るべくは歩き度い一心に鞆も携へ持つてゐるのである。利田さんは大丈夫ですかと幾度か念を押すのに私はむしろ暑いから上衣をお脱ぎなさいませ、その方がらくでせう、私は大丈夫

ですといふのでそれではと立ちあがる。風もなくただ真青な空を折々雲が白くかすめ流れる秋日和である。目指すは南三原の駅であつて十五時五十分の汽車には乗れるだらうとの予定でそれでも館山十六時発よりは早くなるといふもの。真直ぐに街道添ひに歩く。バスでは余り目につかなかつた彼岸花が畦々に群がつてゐるのも印象深い。

大分歩いたところ十字路に出る。一本の標識が立つてゐる。まだ真直ぐにゆくつもりがそれによると左に曲らねばならぬことになる。訝しく思はれるままに立ち止つてゐると自転車に乗つた人が通りかかつたのできくと矢張り真直ぐに行けばよいとのこと、利田さんがその標識にかまつて抜いたらスポリと抜けたので正しいのはめ直してまた歩き出す。

どうやら次第に海の香が漂つてくる。家風は日に日に吹けどと防人はどんなにかこの海風汐風をなつかしんだことだらう、丸村このあたりからは全体どれ程の人が防人として召されたのであらうか、そのうちの何人の人が歌を作つたのであ

らう、知るすべもないがいまも大してその頃とは氣候の変化はないであらう、この溫和な土地から丁兵として遙々出かけて大阪の海風にふかれてあの歌をつくつたのであらうか、九州まで行つてからの海風があつた歌をなされたのであらうか、などと防人としてのびながら昔もなく足を運ぶのであつた。豊田村・千歳村・南三原村といり組んだところで、人家も多くなつて古川といふ部落にさしかかつたとき、館山の漁網商加藤東水氏父子のオート三輪に逢ひ拾つて頂く。幸夫氏が運転される傍に乘せてもらひそれから南三原駅までまたたくまにしまつた。

そのとたんに利田さんは齒医者さんを探して入つてゆくのでこれは齒痛が起きたのかと心配してゐると、この土地の文化人藤好氏宅との事、そこで一寸またさされてゐると歌人角田喜久蔵氏が求られ地形等について細かく説明をして下さつた。氏の考察によると大休千葉氏は三紀層から成つてをり、海岸線から沓見のあたりまでは四紀層をなしてゐるから、万

葉の頃は海は今よりもつともつと入りこんでゐて、丸の石堂莫越山神社のあたりが当時の文化の中心となつてゐたであらうといふこと、また防人は陸路をつたか海路から出かけたかといふことになる、長狭・朝夷・平群・安房の国々の者は陸路を天羽方面に集まつたのではない、白浜方面へは出てゐないと思ふといふやうな事など、もつと聞き度いことは沢山あるが何しろ思はぬ便で早くついたので十四時五十分といふ汽車に間にあふので急いで汽車に乘る。

(三)

もう外房の景色である。黒潮洗ふ太平洋の磯は岩礁と松に眼界を一転してくれる。五ツ目の鴨川の駅までの時間は短かつたがほつとしたやうなくつろぎを覚えた。鴨川では連絡のバスに乗り、今度は

たちこもの甕ちの騒ぎにあひ見てし妹が心は忘れせぬかも(四三五四)
右一首 長狭郡上丁丈部与呂麻呂
の歌を辿りゆかうといふのである。長狭

街道を走るバスで吉保八幡までゆく。それはこのあたりにはせといふ処があるとていふことをきかされたからである。下車して八幡神社はすぐわかつたが肝心のはせといふ地名はどうも誰にきいてもわかない。それでは役場へゆきませうと吉尾村役場に向ふ。休日かどうかと思つたが折よく村長さんの落合牛誕氏をはじめ四、五人の方達が集まつてゐられゆつくりと話をきいて下さる。土地台帖の現在使用してゐない成るべく古いのを持ち出したり、電話であちこち聞き合せて下さつたりする。それで態々これから役場まで来て下さる方もあるとのこと、その間に私は古泉千樞師の墓参をしたいと云ふと長狭高等学校の先生龜田ふく氏や女性の方達はよるこんで案内をして下さる。今年は先生逝かれてから廿五年目である。丁度彼岸中日にこの吉尾村に参り合せて墓前に額突くことの出来ることは全く不思議である。

果して今日明るいうちにごとまで辿りつけるかどうか危ぶんでゐたのであつたのに、引き返すやうなコースになつても

房州に來た以上はお詣り申上げ度いと願つてゐたのにこんな都合よく賑やかに お詣り出来るとは思ひがけないことであつた。この前來た時はまだ千樞先生の御生母が家を守つてゐられたが、いまはこの母君も故人となられ同じ墓所に眠つてゐられる。その墓前にも合掌を捧げた。

再び役場に歸つて來たとき淺岡弘氏が來てゐて下すつて土地地名等について改めて地圖を見直したのであつた。結局古い地圖と云つてもとても万葉期のことをしるには無理なことを思はせられるのであつたが、最後に村長さんが語音で云へばサツカベといふところがある。字は作掛と現在が古い地圖には作壁となつてゐるとの事を申され、或ひは一つの手がかりとしていろいろの御厚意を感謝し、日も暮れかかつたこと、今日はこれでうち切ることにした。

吉尾村には現安房歌人会長の安田稔氏がゐられる。安田さんは大方を東京で過ごしてゐられるが先程村長さんが電話をかけて下すつたら在宅で今夜はまつてゐるから一泊するやうにとのこと、安房の

史料もゆつくり調べたく安田氏宅に赴く。夕飯後安房郡史などを拵げ見てゆくうちに「日本地理志料」より抄記といふなかに、「丈部(波世豆加倍)蓋し走部之義丈部氏ハ加茂県主ト同祖。天平勝宝元年記ニ上総ノ人丈部大麻呂ニ從五位下ヲ授クト万葉集ニ下総印波ノ郡ノ上丁丈部直大歳ト云フニ同族也。」また「安房国誌ニ云フ 大幡村ニ作壁ノ地有リ。近時作掛ノ字ヲ用フ。蓋シ丈部之転訛ト。

図ヲ按ズルニ大幡・佐野・古畑・金東・平塚・奈良林・釜沢ノ諸邑ニ亘ル。」とあるので丈部氏より從五位下の人が出てゐること、与呂麻呂とも關係あつて防人のなかでは或ひは相當の責任や役目を負つた人ではなかつたらうか。これらの諸邑から出た丁兵の頭目ともなつてその歌が代表的に残つたのでなからうか。そんなことも考へられる。

二首の歌について今朝から調べ得たことはこれだけであるが、遠い遙かな日への郷愁と、また何か追々に識ることが出来るであらう希望とが快い疲れのなかに溶けあつて、二泊の予定をとつたことを

よかつたと思ひながら、兄弟子稔郎氏と師を偲びつつこの夜も話はずきなかつた。

(四)

九月二十四日今日もお天気は上乘で、利田さんは作掛の地を自転車で一巡りしてくるとの熱心さである。鴨川町に注ぐ加茂川の上流を安国橋・加古川橋・大幡橋と長狭街道を西へ西へと行つたが、風景には別に変化もなく、小高い丘を越え、薬屋根と瓦屋根の散らばつてゐるその後には低いながら清澄山脈が近々と感じられ更に南側にはこの土地を抱くやうに嶺岡山脈が迫つてゐた、といふ報告である。午前中に安田さんのところを辞して鴨川に出て小湊に向ふ。妙の浦まで舟で出て海上から清澄山のあたりを眺める。「千光山清澄寺旧記」に「上古事勝国勝長狭命当山に鎮座あるによりて此の郡を長狭郡と名づけたり」古事記神武段に「神八井耳命者長狭国造之祖也」とあつて長麻之義で麻の宜しきところから生じたのである。

今日は天気もよく海も風いでゐるが、もともと天富命は農耕の民阿波の忌部氏をひきゐて、紀伊沖をかすめ房総半島を洗ふ黒潮に乗つて今の安房の地に上陸し、粟・麻・木綿の栽培を教へ、四国の阿波にその氣候がよく似てゐるところから安房と名づけたといふ。いまでも菜の花が日本で一番先に咲くといふ国である。しかし漂流の民は何処からも辿りつたのではなからうか。それらの血はすでに防人のなかにも流れてゐたかも知れない。

萬葉旅行の記

— 鎌倉方面 —

かねての予告の通り十一月二十八日(日)の午前九時、鎌倉駅の待合室に集まつた人々は、会員非会員をあはせて四十余名、仲よく御夫妻お揃ひの方もあれば、お子様連れのお母さま、お父さまもあつて、和氣鬮々。折しも鎌倉駅前は、鎌倉一周全国都道府県対抗マラソンレ

い。海洋性の氣候のなかに育つた赫顔の逞しい壯丁が生ひたつたにであることなど思ひながら、和船の櫓を押す漁夫の手もとを眺めたりした。

舟からあがつて時間はまたたつぷりあるが、今度はこれだけにしてまた出直すことにしませうと、利田さんを館山の方へ送り私は千葉ゆきの汽車に乗つて外廻りで帰ることにした。お天気にも恵まれ、明るい房州の地を歩くことの出来たことはたのしいことであつた。

スの出発点となり、数千の観衆がひしめいてゐた。

鶴岡八幡宮の朱の鳥居をくぐり、銀杏の落葉を踏んで、一行はあの見上げるやうな石段の前に立つ。大銀杏の黄葉に晩秋の薄陽がほのぼのと匂ふのも美しい。燃え立つやうな黄葉を背景にして、森本

博士の臨地講義がはじまる。遠き鎌倉時代の歴史的実を吾妻鑑や金匱集やその他の文献を引いて興味深く語られる博士の頬は紅潮する。談たまたま宋朝暗殺のくだりに及ぶと、あそこの階、この広庭と博士の講義は、きはめて具体的となる。一同は眼のあたりに歴史的現実の幻影を追ふ。

ついで、八幡宮に参拝し、境内にある万葉植物、棟の実を拾ひ、やがて近代美術館の前に出る。館内には、中央アジアの古美術の展観中である。わが国の埴輪に似た出土品、法隆寺の壁画のやうな彼の国の壁画など、古代における芸術の世界における相互の流通影響の跡に驚歎する。

かくて、いよいよ万葉の世界に足を踏み入れる。八幡宮に遠からぬ妙本寺は、権律師仙覚が、万葉集校勘の事業を完遂した遺蹟である。参道の楓の落葉を踏んでかさこそと登つて行く。この参道にも、青苔、厚朴などの万葉植物が少なくない。一行のうちには、年輩のある紳士が、家持の「皇神祖の遠御代御代は布